



唯

—

二編

文

會目
508
20



あつし 根本華峯の二大師ハゴも也ハ大師
をばをよよく知りまひせり都鄙崇敬下り
者多しがふ本地十方慈父れ觀自在大薩埵にい
まはるるゆゑ慈眼親衆生の誓いごとひれ
りし故に增長菩提心を析てあらハ人間等
願するに響の如く應ありしやゆゑあるをれ也
はとてしつてもゆゑめんたる永き開路を照し
たまふと祈りしりて楞嚴の由我觀聽因明故觀
音名遍十方界一能以眼根作耳根佛事故名觀世
音自立無礙し云之と曰ひて

七ツタマツるゆゑびしは家のナリしりしてきてさふ
川とせ下に向ちるるどくれ云云きて

新しき屋舎をとりす川いふはとふ家のゆゑ
一声江笛晚池館採蓮花水動魚迷徑林空
鳥有家素琴初月冷銀者含秋斜晚酒風煙

外穿雲將上植
攝列長柄の橋れ木りし 故二品亞相家老安卿彫刻は

くろる地藏尊や靴さかぬりなりては慶東行に
身にとるゆりしりいなる因縁や多の御座人の内
れ此山にゑりしと任ゆりしとほりけり
たはゆりしりし彼大士の像が院主にまひせ永く
尚院に安置したまひて多世人は縁縁し
ゆは生前の喜且ハ死時のりしとよと外我後

の世と枝拔たり少して

たけは浅瀬とてぬきとて川をまらぬは若松長
靈祭の比いさくぞと枝をくみか世のなむつ
びりりなきい今い象下れ客水にありあつ
そつとよこさ舞うるましてまきさし形は様
風よ所くそ怒の岡にすくそとりいぶる外れ
そたの下海とたむけれあそれしゆると定め
る辰鐘又枕の声は心とすそてそやかくても
あつまほしきとそもそろろ作を焼くまげ
るすすもいししめぐり

月前達懐と

思はよぬい此様とて思の星月よんせと
護玉院の常不退轉念仏所にしてある人くれ
為に祢名して香す火ゆるとて

脱無辺草海 頃八天華光 落々大千界
金風甘露涼

本照院座主

うそた小房と神のたまはれ候といつむきし好月
一品の宮に御墓所ねし奉るも永く久遠壽院
准后代培に参りて彼康存の御時ましくま
せて法の道流りしすかし秋といふらん
りてこれゆら

幾年秋も秋れきことと出衆の若れ下
イ今日よ、主神君立しきましきい
赤き候とれどゆらとこれ一日一日

常楽院の百方返會しすまを

ふらふら横川のぬい秋にきてはぬ光れ月とすまを
くろくまといひ玉のねといふるたよるや柿の月氣

十六日大殊樓しぬる遠さかふあ目とよやうの

海門秋雷松声静閣上風旋旭日迎歴々
掌々新眼界凌雷俯視碧瑋々

人のくこやつらす

おまの相の一をた落とめそゆあよ池乃あそこゆや
女帝花と人のとくりし思ひ人あふあふの陸ゆ

一すれどあひりし

二十四日は天台の御忌日よす三昧堂にして懺法會
作りしまに六根の罪と消ゆるべりして懺悔の
あつらひ

まよふまよふはあはれとれし何乃まればのまに

大佛殿のくりに悲願金剛の鑄像はしすま客此近

きりしうしあはれ相合六所に地藏尊の像細めをまて
詩人に縁ひ縁しむれま今年九十歳とくまら

弥陀の名号と教面に書き地藏尊の利益を記して
人おおるたのくるとしと好のこまよあま河津陀仏

花の竹うきうきうきうきうき
そよそよ老れ坂ゆく道まよまよしものよき波の街に

十年堂ハ 猷廟の令にすて無候のきたまるとん

平盛久代受若の御誓せすは白刃断て不忠儀の灵瑞
まじくくする尊像にありく縁記也とてしけ堂にして
乃よてたてし誓せ栴檀くらげや今と人よすむ
とてししと三年の始にぬぬ二月十八日平盛久命

東叡山学頭凌雲院前大僧正實觀和尙仙波の星野山東叡

彼寺ハ慈見大師基弘開き許陀の像と調刻して安置

野の里はどそくびいもろろけき所とさこゆさてと

凌雲の亭より南東をろろに望みハ東都半ハ眼下に
又つて上総下総安房等もろろと見ゆ多新南四川

ま川ら山並く月の夜いとく與あり
ふれと又ふたの松たし射て磐石山の月やですす

これ見ゆはし約ると同族ありやけ堂は我前二品

家は寛永四年卯九月に建てたす奉り
は紅顔梨色の阿弥陀如来宝冠觀經二菩薩たす

の字謹神とて嗚呼法華妙部に如来親しく性生と

記し華嚴頓教普賢解陳たまふ執持名号れ功德
如来一代の會しん稱讚しん十方の種覺と

如証識しんたすふ玉濁の悪輩末法の亡頼者とりん

ととと弥陀大願業口に依てたやすく無為の報生に生ず
る事なきうたのまごありきと凡そハ王三昧海に入
て在纏カイヤの罪垢と滌き、塵累の清淨は得て五養の
勝蓮花と同ヒキ親マアタ也来れ先量光現現前に菩提
乃記と授オカガりて化身無數百俱胝智力廣大にして
イ方ニ偏ヒ一著ツく一切衆生界利度せん
亦紫ムラサキくくすやくくくく像イマゲはね
室号と唱ナゲて香コウたてする

巍然イニ獨坐法堂秋月面光円満玉樓タカ易性西方
十百億一声一念豈難修カマシヤ

亦ナ華ハナ茶チヤ大師の遺風と名
蓮風送暑露華浮獨歩微吟慰ニ遠遊玉

字無塵東岳晚水光山色双清煉

古丘池遠白蓮溪緩歩惟吟半日遊眼
庭翠密避暑處林頭風靜寺門秋

夫木の歌ハ今の人につくしとひしとくせし
ありとや蜘蛛の糸よとていとタイキヤおきか声ハ多の
じくジクととと東ははつぐくと多し

僧と念佛往生の事おごころゆりし時客キヤク云クニ轉マユ

鑑十四建久五年五月二日

由比浦の漁丈無病して死す往生の瑞想

ありて諸人奉て紹縁を端座合掌して聊勤搖れし
し記せし是如何なる念仏者なりらん吉水大師西化

乃日漁人我勸て往生せしめ給ひしに
大師の傳ひんは滋中よりハ慈山良快顯真明遍

等也言傍智識より蓮生教阿等不学の僧幾百人
共に西方に往生し且上二代の至尊后妃竹園三公

九卿と始武家野人愚丈愚婦及び強盜獵者漁房
の婦女此類しが念佛往生の教に添し是に實に如來

大悲の誓願機と多しん給ひ十方善惡の衆生至心に
信樂して彼國に生ぜんし教に單直に念仏して

往生請せし人々をいれしこ方のゆゑに
無分の機ハ他刀の出離の外なき諸佛さま亦た如

也しある上人に勸られしをたすく是下
。不然禪尼ハ東福院の女房なりし女院くればなま

く好陳變して諸方の禪師に参りてあてなみ明眼
の危れりしを出家の初しちのころに記をいし

ひて自面貌と燎し其頌
肯遊宮裏燒蘭麝今入禪林燎回皮四序流行亦此

不知誰是竹園中移
生る身とすやく身かしは強よ新し心はざりせむ

東都に下りて紹縁多ありし晩に鎌倉よりつらみえ
ししる所日記をきときし一巻の和歌其人にとく

られし其一冊をくす得たりし昔日彼禪尼よ

十、
高むす秋の夕に霞のすむ川原に月やうららかに
田田川と東の方にはりし

昔のしがさかたけをたれ秘してはとらうさのやぞうり
ま

十三日のおはしに雲を巻いてそとすこすこれに松
影して風よ一声の蝉のいよこを分けて水に連ぬれ
月とくはたを桂苑殺替成遺り羅葉月が揺ゆさま
りふさるをわし一風使と池の池に遊びて湯陽の江
もふこれゆきし一まどきこし一はざら
この松をくんとおま吹きて合れおれもらうか
おむものすこく夕一或僧のそやうも
三のひのちて代雲の村てきひのえか
十四日の夜を雲たらしとほひるま
まれ風の如し

まゆらふゆ神の露かけをきこもむさし
ナメのまを後て月とふさで一とく口と一
こあをるに尺一光もさるり一妙竟信如す
はるせー詞

風揺白露世孤絶海に産才一何文情可
諸武後三日月不音桂新一年明
鴨長明かこいれとぶられ妹のちくうハと
とあひひいさきて
あむら神いとけをと青と月影をぬ徳のまはし
十六夜雨あつて月入るるりよれ立待の君は心

燈下台家の学研きくい登せびぐふ異知とりこと
 後世に至りて山外れ説をのこりてあそひて天台の四
 とすれゆらまや我國中古の記れ俗に近く作ら
 をせよ—こて其實とく—こゆらざるも—こ
 ある但し華峯惠心の後眼ある人もすれゆら
 —こや智礼智旭ハ其徳其行甚高—今の人徳
 行はす、文辞に眩き異と好之奇孤偉ひ菩提心れ
 きこそいも—こか—れ或ハ教觀の旨と外に—
 ひさす—一經の徳にほるゆいあるぬ邪解も後
 て謗罪のり—こす—きも—あを—こ—ゆら
 此師ハ一山れ学頭に—こ智行ゆさ—ぬ知識ある
 いらぬあ—あを—こ—師に—こ—
 立入らぬ道とも同ひゆる—こ—れ—こ
 孫—こ—六字あ名号とくさ—こ—れ—こ—
 —こ—こ—流や玉川の水よき—こ—すのり
 文殊楼の西坂ニシカの下ニドに穴神アナカミとて祠ホコラあり鳥居に忍岡ニシノ橋
 荷と標す此中—こ八幡大席義家奥列下向の時建タテ
 らる後に頼朝卿御参あり—こ—云、古いて奥列の
 通路れ—こ—とやいと景—こ—地之神も亦々験あり
 —こ—こ—人武人云延喜神名武に穴澤之神社
録ヤルモ人ともゆる也
 竟惠の道の記に忍岡よ五條天神イナす—こ—云—こ
 其社今の山王れ地—こ—り—こ—聖堂ハ尾公義直卿建
 せたまひ—こ—は天神の北れ方あり—こ—元禄三庚午昌
 年坂—聖堂と後—こ—たまひ—こ—時天神ハ黒門の前

後一まわしり同し十年^天九月災せし後
今此茶屋町に後一^立五條天神二座と祀る別當ハ代々
連歌^{天満}私^神学びて前にハ柳當の御會ありとすのほり
しとせん

今清水寺の地を堂ありし所也

當山ハ藤堂家別業あり其先高の香火の
場と建寒松院と号し大畝公實永寺御建立ノ
時この山に東巽宮と藤堂家を建られ寒松院ハ
以て別當とせし然れハ寒松院ハ根木代仙院と
しとせん

湯^{コシマ}寫の南に妻戀^{ミコト}明神とて小祠あり^{カミナ}船荷^{フネノリ}しとせん
實盛^{サツメ}の住所永井の庄也^{今長江}實盛^{サツメ}ハ葉柴^{ハヤシ}の宗仙寺
に在りしと

所の者妻戀の神と實盛^{サツメ}生^{ウラ}川一處にハ^ハ實盛^{サツメ}
越前代産也^{或人云妻戀明神ハ日本武尊の靈なり是神攝壇と云}

け春^{享保五}朝定不諱の御事^{庚子}始しとす

七月廿三日^{ウチ}内の御會始しとす

緑竹年久 汗製

茶取^チる緑の竹れ^チけせしとす^ハぬ^ハ茶^チ取^チり^ハて^ハす^ハ

公郷^キれ^キ歌^カり^リもの^ハと^ハゆ^ハり^ハし^ハ中^{ナカ}に^ニ 高泉

通躬卿

言^{コト}れ^レあ^ハぬ^ハせ^ハぬ^ハ庭^ニの^ハれ^ハと^ハし^ハこ^ハす^ハら^ハ同^ニれ^ハぬ^ハ存^ニる^ハ子^ハ

實陰卿

かみ^{カミ}ざ^ザし^シ十年^{トウ}あ^ハぬ^ハる^ハ異^イ行^{コウ}れ^レを^ハあ^ハ代^トハ^ハ君^{キミ}の^ハ代^トの^ハう^ハげ

日一廿九日 院より詩歌合舞ありしとき
させりし事あり

勸学院の了翁僧都錦袋田賣業の始祖也ハ禪に参り大光普照

國師和尙其門人より忍園の池中辨天の場に勸学院と

作て經藏と建られ後今此地に遷す宮の即所の高泉

禪師の碑銘と書てこゝに置れし後僧都諸列の梵

刹に一切經を奉納れり二十藏と云實は結縁の儀

ぬ事とし後所の忌日今勸学院のりなき諺所にして

毎日の請けり一山の学寮に用れり其徳仰ぐ下

院の本尊ハ唐仏に親迎也

今此寺ハ探取前大僧正實觀子等に番頭と置て学

東岳に雨降聽て

山迥日沈陰又晴 無論旅工叫雲狂

中酒入對燈睡 一枕秋風成雨声

八月廿七日 初下り多りれり

武氣堂堂名のよみよ声なき尾籠尾籠のり

去月の初砧れ音と聞しわかれあはれし

たも紙と思ふのそれ村もさほのるあまれ衣り

妙堯上人詠作詩し加す

直節虚心不受行 七賢林下豈迷途 秋月

掃月玄丘竹夢玉玲瓏 悅耳娛

重陽為晴て秋色清一音坊一遺す

消索江村細菊 孤吟信步 獨偷閑魚

福寿院の境内に亀山と呼ぶ丘あり芝にも曰く名
の一軒あり新設しつめがらう惣門前、此寺常樂院ハ念仏の
道場よしてせよ六角とて呼びし豊嶋トモノ門前
某女多の為に武藏野に六所の堂を築き阿弥陀佛と名
置せしせん若の世にりし村としよ地の如き依
才とて一亀舟下れ如米と終終とす二季に彼山岸
會合十夜等座下の胃多く巡幸す

木一かよく六休成作ツク進ツクしてと云

九月十三夜こゝに形すもて月影はほくくは
恐の思れすまかとしまはるあめをいほん文殊
棲すまれ思おもひくぐとあそひ月足ゆり
うごきて秋とすうごきほ葉末又流るる神のねり

年ふとといふ子ねんを路やふのふねをいふれ一月も
或人

つるをたけいりかきと音れあれよの月れきく
ときこしこあをれとくうあさび子お松た下り敷
にあすとと申く言のこもて色やあれんとさ
妹の半れ月につれあそひ雲ゆらんもあせし月
ナ言れ夕をくいと志かけく星よのゆて月と夜
竹しゆすそせく音川うろくまきさいし
山の駕も竹くもろくさしわらさぬいそし
ゆく寒すさし世れ秋のすさこそしとあふ
そにけんん足ゆもろこし

果とれり院前ヶ高城をわてひうり秋の月のひきし世

身と置ゆるしむく中^ホにあらざるまゝあてちを
住持つゝさうる^カを^キま^ハけつと^カひも
ゆるず^カと^キま^ハけつと^カひも
うぎれ^カ等^キ恩^ハの^カ所^ハいと^カむ^ハて^カま^ハり^カ
さあ^カそ^キ旅^ハ宿^ハに^カ帰^ハり^カ又^キ修^ハ半^ハの^カ
あ^カむ^カと^キら^ハり^カと^キら^ハり^カと^キら^ハり^カ
君も^カ利^ハぬ^ハに^カぬ^ハき^ハこ^カの^カと^キ感^ハぜ^ハる^カも^カ
そ^カ好^ハい^カ岩^ハ窟^ハの^カ奥^ハに^カ閑^ハ地^ハと^カ得^ハて^カ口^ハ許^ハり^カ
の^カ庵^ハひ^カに^カ續^ハび^カ内^ハま^ハせ^カに^カ月^ハい^カづ^カと^キ調^ハ度^ハと^カと^キ
ホ^カ舎^ハ一^カ片^ハす^カて^カ飯^ハも^カと^キ所^ハず^カ粥^ハあ^カと^キ所^ハ飯^ハ地^ハ
輔^カの^カ時^ハと^キ所^ハ金^ハ穀^ハら^カち^カ所^ハ所^ハ名^ハ
斬^カに^カ觀^ハと^キ所^ハ柴^ハの^カ
戸^カと^キ閑^ハて^カ閑^ハひ^カ来^ハり^カ人^ハと^キ一^カ庵^ハ拾^ハり^カ一^カ草^ハ庵^ハれ^カ
隣^カ子^ハに^カ書^ハす^カと^キれ^カ一^カ和^ハ歌^ハ
う^カそ^カを^カの^カ信^ハと^キ道^ハ念^ハ念^ハ也^ハね^カを^カ外^ハれ^カ女^ハと^キ所^ハ身^ハ
う^カと^キ所^ハ念^ハ念^ハの^カ功^ハと^キ所^ハて^カめ^カと^キ所^ハ性^ハま^ハと
そ^カけ^カた^カま^ハい^カと^キ所^ハあ^カる^カ民^ハと^キ所^ハあ^カら^ハひ^カと^キ所^ハ信^ハじ^ハに
西^カよ^カ向^ハい^カたる^カま^ハい^カう^カつ^カが^カて^カ合^ハ掌^ハも^カと^キ所^ハず
そ^カは^カい^カひ^カ人^ハと^キ所^ハに^カつ^カげ^カと^キ所^ハて^カい^カと^キ所^ハと^キ所^ハ
と^カあ^カら^ハり^カ一^カ時^ハ葬^ハ又^カ會^ハせ^カ一^カ偽^ハの^カ今^ハ東^ハ叡^ハ
山^カよ^カあ^カら^ハり^カ一^カの^カあ^カら^ハり^カと^キ所^ハと^キ所^ハと^キ所^ハ
に^カ信^ハと^キ所^ハと^キ所^ハと^キ所^ハと^キ所^ハと^キ所^ハと^キ所^ハ
僧^カ法^ハ師^ハ縁^ハ也^ハと^キ所^ハと^キ所^ハと^キ所^ハと^キ所^ハと^キ所^ハ
と^カく^カ多^ハ利^ハと^カの^カ念^ハ也^ハ寺^ハ院^ハ建^ハ立^ハに^カて^カと^キ所^ハと^キ所^ハと^キ所^ハと^キ所^ハと^キ所^ハ

此を月よははるむおむお神くくれぬやまの心
持衣函

衣の折れぬまのまにまよまらぬさよの中一やま
鳴りて又鳴いづる秋風にるちすまふぬまのまらと

絶恋

くはぬれぬちらぬまらまらぬまらぬまらぬ
中のまらぬ

紅葉

そのまらぬまらぬのまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬ

寂後恋

これまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬ

○ 霜 富冬至 上月

経日谷不始 千里信梅苑三五念香寒新香 難に

便 御思 勤竹葉強為一笑歡

○ 山門探題前大僧正實觀在時の記念にしてそ天台大師此

影像以新登し 彼御臨末元量壽と讃ト なるひ

偈以書し授けし 子 庚十一月九日 大師講に其直掛

奉り 慶讚 信頼 一まらぬまらぬ

持地 親然睡 當年老作家 何言階代化

真是 古弥陀

九 沛香以書し 偈

佛 羽風子 壑雪 棹関梅白別 同春

台雲 純壁分 天半 洞心 當面 月一輪

落月 士卒の雪に 残已 細雲 紫色の 濃

西方引 接れ 曉とも なるい けり

易往而先人の心坎ありし下けり

いよは是の世にまゝなるをと秋を遠く高のうのひ路

○ 仏成道

鍊骨幾年北石間 天香乍折玉肌寒

イハ春色得誰識 唯有曉星照雪窓

○ くらゐ暮の秋

此はたゞの柳のいと多し 〇それより白ふ柳がえ

茂きはるゝ秋の風を 松山よりなごれり

○ 享保六年辛巳元旦

物言 氣和春正融 江山蕩漾朝曦紅 知韶

光 不^レ分^レ高下 苑信一^先傳 百^一戸^一通

化日由來擊壤歌 况魚初躍鳥声和 春山

期待 開苑路行處 望新得意多

此春將帰郷

立多れり露の園はとま^り明物^のなごり

○ 周防守貞軒老人居地知倦と号し鳥山林友と号し

よと人々に詠せしれ一時

前大僧正實觀

心とれらるるん當に糸竹多ぬるれしと

全

信阿

微風吹^レ緑^レ柳 垂^レ淡^レ苑 落^テ琴^レ牀 烟^ニ樹^ニ深^ニ無^キ

銀^リ山^光 怡^ス鳥 性^清音^恰 晚^還林

石多^ク河^水枝^けけ^らく^た多^クて^さす^か世^に假^まま^の山^竹

うぬい今さらこれにうちとごらぬぬとら
とらぬぬは廻り回流くしてあとの浪消
あつきの白日二匹ひきあす待て命う
三月尽のあつれとくよもりう
まるといふの死に物あつてうらむの山は信

○東都より或人とくくれば喘息の業水無瀬家

六君子湯

石加味 天門冬 麦門冬 五味子 熟地黄
此回味の外箱根草信に加て用ゆり妙あり

○駿州巨カウ鰲山清見真國禪寺

洞山第一祖開聖禪師聖二祖師 高法 准門祖勅賜宝珠護
國禪師中興勅賜自覺聖智禪師大輝暹和尚

是く人元双の勝地也客殿は鶴の繕り 雪舟の業と云 臨門眼清く有渡の
濱三保の崎詠はきせす守前紅梅合盛に用一株は七葉 七同録の七木

鰲山 衝翠 玉梅 菟一 簇 紅雲 照海 明月
紫府 清香 暖風 衰枝 南枝 北 別乾坤

法見じらんをのまれとけと共のうぬ梅のり
幸七二月廿二日の口号其中後に見出せし故に記す

○卯月朔日れん

つとむぬれ言のまにまらて死はきのみれ名物だぬ
我張府おろしとまのし子規鳴さうしこ
いしと 是年うら

けり 是れはと手紙ぬり路のしれはびり

○松本宮内省 紫雲山 龍王寺 龍王寺 龍王寺

